

眺

東堀区と
西堀区で



欲求が生むものづくりを

京大生らが自転車を題材に体験

南宮のインダストリー ネットワークショップなど企画

岡谷市南宮一にある インダストリーネット ワーク(大橋俊夫社長)と京都大学術情報メディアセンター喜多一教授の研究室が企画・運営する「利用者参加型ものづくり」ワークショップが六日から八日まで、同社で行われた。「諏訪産業集積研究センターII S I A R C (サイアーク)」や同会に加盟する諏訪東 京理科大学、東京工業大学などの研究室が協力。喜多研究室の学生ら約十人が、与えられたものづくりではなく、さまざまな利用者の視点や欲求からわき出すものづくりの本質を体験的に追究した。

諏訪地域の工業集積と大学などの研究機関をつなぐシンクタンク「サイアーク」発足当初から同研究室との交流は続いており、「利用者参加型ものづく

罪予防などもねらい、関係両区が共同で整備に着手することに。昨年秋、西堀区はJR鉄

中央町三のコミュニティカフェ「ほっとサロン心と」で、八日から歌声喫茶「フォーク

青年団代をよのかえりさせた。今後、歌声が響く中央通りを目指し、毎月第二日曜日午後定期的に開催していく。

夏での空き店舗を改装してオープンさせ、夢を共有する主婦五人と運営している。これまでも二階でコンサートや

か 野声で中央通り性化をの願いを込め企画した。会場では、シンガソングライターの岡



自転車をさまざまに「いじって」課題解決に向けた形を模索する学生ら

り」として、学生自身の生活の中から発想し、利用者となって日々ものづくりを、地域

の中小企業が試作品で形にしていくという関係。昨年は傘をテーマにワークショップを行い、今回は複数の大学がひしめく京都市内や京大の学内が、学生らの自転車だらけで大変な状態になっているという野外研究から展開し、「自転車で京都の町と大学を救え！」をテーマに据えた。

初日に京大での現状報告を踏まえ、同研究室に東工大、信州大、諏訪東京理科大の学生も加わって、さまざまアイデアを自由に出し合った。二日目を降は用意した自転車と実際に向き合い、課題解決に向けた自分たちのアイデアが実現できるかを模索。学生たちは寒空の下、さまざまな工具を手に自転車を解体したり、ハンドルの向きを変えて最小限の駐輪スペースを検討するなど、「京都の町と京大を救う」ために必要な自転車の形を、少しずつ描いていった。

喜多教授は「机上の空論という言葉は真理。机の上だけで考えるのではなく、トータ

ルなものの見方ができるようにならないと本当に社会に必要なのはできない。今の本は高度なものづくりの技術はあるが、何につくればいいのか分からないという状況」とし、渴望から生まれたいものづくりの本質が薄れる中で、視点を交え手足を動かしてものづくりを楽しんでみるなどの大切さに触れた。

同ワークショップでは今後、岡谷工業高校の三次元CADを使ったいものづくりの見学も予定している。